

令和8年度 第1回徳島県教育振興審議会 会議録

- 1 日 時 令和8年7月30日（木）午前10時から正午まで
- 2 場 所 徳島県立総合福祉センター401会議室
- 3 出席者 委員17名中15名出席（2名欠席）、教育長ほか教育委員会事務局等
- 4 次 第
- 会長、副会長の選出、諮問、徳島県教育委員会の取組についての説明等
 - 会 長 佐古秀一 鳴門教育大学長
 - 副会長 佐野 靖 徳島文理大学副学長
 - 副会長 松坂孝紀 神山まると高等専門学校理事
 - 村川雅弘 鳴門教育大学名誉教授から「今後の教育改革の動向」について情報提供
 - 意見交換

5 議事録

【議事 徳島県教育委員会の取組について】

【佐古会長】： それでは、次ですが、徳島県教育委員会の取り組みについて説明をお願いできるでしょうか。

【事務局】： <資料に基づき説明>

【佐古会長】： はい、ありがとうございました。ただいま徳島県教育委員会の取り組みについて説明がございましたが、ご質問、ご意見等ございますでしょうか。

【長尾委員】： 公募委員の立場で参加しております長尾と申します。徳島市の方上小学校でPTA会長をしております、徳島市PTA連合会常任理事もさせていただいております。私どもの次女自身も不登校を経験しております、最近では特別支援学級の方でお世話になっております。そうしたご縁でPTA会長を務めさせていただき、様々な講演会などで勉強させていただきました。県の取り組みや、学校でのスペシャルサポートルームの設置など、色々と対応いただいていると感じております。しかしながら、根本的な対策を行っていかねば、不登校の数は減っていかないのではないかと考えております。現在も現場で懸命に取り組んでいただいておりますが、どうしても対症療法にとどまっているような印象を受けます。本当に根本的な見直しや考え方が必要ではないでしょうか。全国で子どもの自殺者が500人以上という数字も出ており、非常に痛ましく思っております。徳島県内でも何名かおられると思います。先日、中学校で三者面談がありました。妻が帰宅して話を聞きますと、先生方は頑張ってくださっているものの、子どものできていない部分を多く指摘されたとのことでした。まるで高校入試間近の指導のような厳しい言い方だったようです。次期学習指導要領におきましては、探究学習や個性を伸ばす取り組みなど素晴らしい内容が盛り込まれており、非常に良い内容だと思います。例えば、特例校である吉井小学校の取り組みは、サキドリ研究校として先行して取り組まれており、本当に素敵だなと感じております。このような学校を今後徳島県内でもどんどん増やしていき、子どもたちが本当に楽しいと思える学校に

していくべきではないでしょうか。できないところや苦手なところばかり指摘されると、嫌になってしまうのではないかと思います。甘い考えと言われるかもしれませんが、今の時代だからこそ、子どもたちを褒めて伸ばしていくことが大切であり、そうした方向性を深めていくべきだと考えております。

【佐古会長】：ありがとうございます。非常に貴重なご意見をいただきました。県の方から何かコメントやご回答はございますでしょうか。

【事務局】：いじめ・不登校対策課です。貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。ただいまご指摘いただきました通り、県におきましても不登校に関する様々な対策を進めているところでございます。校内におけますスペシャルサポートルームの拡充や、学びの多様化学校につきましては、このたび校名が潮彩中学校と決定いたしました。多様な学びの場を整備し、お子さん方の居場所づくりに向けた各種対策を推進しております。学びの多様化学校につきましては、鳴門教育大学と連携させていただきながら建設を進めており、令和9年4月の開校を目指して急ピッチで準備を進めているところでございます。8月には現地見学会、またこれまでも学校説明会などを実施してまいりました。今後とも皆様に適切な情報をお届けできるよう努めてまいりたいと考えております。

【長尾委員】：ありがとうございます。先ほども申し上げました通り、学びの多様化学校などの居場所づくりは素晴らしい取り組みだと思います。しかし、やはり根本的な対策を行わなければ、一時的な居場所ができて、不登校自体は減っていかないと思うのです。不登校を減らすために大人全体で何ができるのかを真剣に考えていく必要があります。子どもたちにもっと寄り添うことが重要です。学校の先生方も多忙で時間がない状況ですので、先生だけに任せるのではなく、地域の方々も含めたすべての大人が連携していくべきです。コミュニティスクールなどの素晴らしい仕組みもありますが、徳島県内ではまだ十分に組み立てていない地域が多いと感じます。そうした仕組みを循環させていけるよう議論を深めるべきです。これから子どもの人数も減っていきます。昔のように勉強して良い大学に入り、良い企業に入るといっただけの時代ではなく、これからは子どもたちが自分の頭で考えて行動できる人材が求められています。そのためには、どのような学びの仕組みが必要か、大人がどう関わっていくべきかについて、真剣に議論していかなければならないと考えております。

【佐古会長】：ありがとうございます。この件に関して、あるいは他の課題についてはいかがでしょうか。

【阿部委員】：徳島県PTA連合会会長の阿部と申します。ただいまの話題に関連してお話しさせていただきます。いじめや不登校に関する会議に参加させていただいた際、不登校の児童生徒数が過去最多になっているというお話を伺いました。同時に県の担当者の方から、必ずしも不登校の数が増えていること自体が問題なのではなく、見方を変えれば、コミュニティスクールの活用やフリースクールとの連携など、学校以外の多様なあり方や入り口があってよいという考え方もあるとお伺いいたしました。今回、計画を策定するにあたり、いじめに関しては根絶すべき問題であります。しかし、不登校そのもの、つまり学校に行けない現象そのものを減らすことを目指すのか、あるいは多様な受け入れ先や形を認めることが大切なのか、時代に合わせて議論すべきだと考えております。民間でもフリースクールや学習塾など、子どもの居場所が増えてきておりますが、小学生向けは多いものの、中高生向けの受

け入れ場所が少ないという課題も聞いております。学びの多様化学校も素晴らしい取り組みですが、それだけですべてのお子さんをカバーできるわけではありません。行政、民間、学校がどのように連携して対応していくべきか、議論できればと考えております。

【佐古会長】：ありがとうございます。

【中西委員】：ムツビエージェントの中西と申します。よろしくお願いいたします。簡単に自己紹介をさせていただきますと、徳島県出身で、2012年に徳島県で人材紹介サービスを創業いたしました。これまで企業約700社、人材約1,000名の面談を行ってまいりまして、企業と人材の両方の視点を持っております。また、保護者としては8歳と2歳の子どもがおります。不登校のお話についてですが、私の8歳の息子も保育園や小学校1年生の時に不登校を経験いたしました。特性がしっかりとある、いわゆる凹凸のあるタイプの子供です。先ほど阿部委員がおっしゃったように、必ずしも不登校という現象自体が悪いものではないかもしれないと私も感じております。当事者としては非常に大変ですが、何が合わなかったのだろうと考え、病院に通ったり学習を深めたりする中で、子どもの特性や環境への適応の難しさを理解できるようになりました。幼稚園から小学校へ上がる際も引き継ぎをしていただき、先生方にも説明しておりましたが、小学1年生の2学期にバーンアウトして通えなくなりました。その後、家庭で良い居場所を作り、民間スクールに通うなどして関わりを持ち続けた結果、復帰することができました。その際も学校の先生方が非常に寄り添ってくださり、放課後の対応や子どもの特性に応じたご指導をしていただきました。2年生になっても引き継ぎがしっかり行われており、大変感謝しております。今回の成績表を見た際、一律の評価は厳しいものでしたが、先生が特別な評価を書いてくださり、親として大きな支えになりました。一方で、一律の基準で評価することが本当に良いのかという疑問もあります。うちの子は特性がありますが、4・5年生レベルの本を読む一方で、文字を書くことが苦手です。1年生の標準的な評価軸では評価されにくく、生きづらさを感じていたのだと思います。1・2年生の段階での評価が社会においてどれほど意味を持つのかを考えると、評価されすぎずに安心して通える環境が望ましいと感じます。社会に出るタイミングで自己理解を深め、人を信じてコミュニケーションが取れるメンタリティ、いわゆるレジリエンスや自己肯定感を育てていくことが、不登校の解消にもつながるのではないのでしょうか。また、現場の先生方は非常に真摯に向き合ってくださいっており、学習内容も昔より魅力的になっております。それにもかかわらず不登校が起きてしまっている現状があります。計画資料には素晴らしい内容が書かれていますが、先生方の負担を本質的に減らすことが不可欠です。単に残業時間を減らす目標だけでは持ち帰り仕事が発生してしまいます。情熱を持って教職に就かれた先生方が、子どもたちと向き合える時間や環境を作ることが最も重要であると考えております。

【長尾委員】：中西委員から素晴らしいお話がありました。私も子どもだけでなく、まずは学校の先生の改革を進めるべきだと思います。授業時間を減らすこと以上に、大人が決めた基準で子どもを評価すること自体に無理があるのではないのでしょうか。得意なところや好きなところを伸ばしていくべきです。例えば通知表の廃止を行うだけでも、作成にかかる時間を大幅に削減できます。最近では保護者からのクレーム対策などでさらに時間を取られていると聞きます。精神的に厳しい状況にある先生方も多く、子どもが不登校になった際などに休暇を取りやすい体制を整えるなど、本質的な働き方改革が必要です。先生方が生き生きとしていなければ、子どもたちも笑顔になれません。また、先ほど阿部委員から居場所を増

やすお話がありましたが、我が家でも不登校になった際にフリースクールを検討いたしました。しかし、距離が遠かったり月5万円程度の費用がかかったりと、経済的に厳しい面がありました。子どもに尋ねたところ「友達がいる学校に行きたい」と言いました。これが子どもの本心だと思います。学校は本来素晴らしい場所であり、地域と学校が手を取り合って子どもを支えていく両輪であるべきです。現在、学校の崩壊が進んでいるように感じられますが、これを食い止めなければ悪循環に陥ってしまいます。この点についてさらに議論を深めていくべきだと考えます。

【佐古会長】：ありがとうございます。他の委員の皆様はいかがでしょう。

【松坂副会長】：不登校の件について少しコメントさせていただきます。この問題は非常に複雑に絡み合っており、最終的には先生方の働き方の問題に行き着くというのは間違いありません。私自身、学校経営を行う中でその難しさを痛感する一方で、子ども達に与える影響は大きいと感じます。働き方改革を進める上では、強力なリーダーシップが必要です。一人一人の意識改革は大切ですが、現場の教職員には上司や保護者などの関係性があり、現場には業務をやめたり断ったりすることが難しい現実があります。「やめて良い」と判断を示せる強いリーダーシップが、校長先生、教育委員会、あるいは教育長などのトップから発揮されることが重要です。現場が強いリーダーシップを感じられる状態を作ることが一つのポイントだと考えます。また、多様な選択肢を増やす取り組みは素晴らしいですが、そこに子どもたちが実際にアクセスできるかという課題があります。送迎の問題や経済的な負担など、リアルな苦労が存在します。学びの多様化学校も設置が進んでいますが、数的・立地的に十分とは言えません。この会議でも、もう一つの視点として、不登校を「家庭福祉の問題」として捉え直すことも必要ではないでしょうか。子どもが不登校になった際、保護者が働き方を変えざるを得なくなったり、経済的な問題が生じたりします。教育委員会の議題を超えて、経済的な支援や企業との連携など、家庭福祉の観点からの取り組みを同時に進めていくことがこの会議でも必要であると感じております。

【佐古会長】：ありがとうございます。

【喜多委員】：喜多機械産業の喜多と申します。教育は学校だけで完結するものではないと感じております。「同調圧力」が社会や学校にあり、参観日などに行くと未だに「〇〇さんと同じです」といった発言が見受けられ、個性を掲げながらも本当に自分の意見を言いやすい環境が学校にあるのか疑問に感じています。子どもが成長するにつれて自分の意見を抑え込んでしまう傾向があるため、疑問や興味を持ったことを発言し、それが認められる空気を教育現場から社会全体に広げていくことが重要です。また、教育長のお話にあった「持続可能な社会」に関連して、世界的にはいじめ問題や平和という理念に加え、気候変動へのフォーカスが強まっております。毎年暑さが増す中で、気候変動というキーワードを課題に取り入れ、徳島らしさを盛り込むと良いのではないのでしょうか。徳島には南海トラフの危険性や豊かな自然があり、土砂崩れなどの地域課題について専門家や地域の方々と共に探究学習を通じて解決策を探る取り組みが考えられます。エシカル消費や農林業体験を通じた食育も、郷土愛の育成につながると感じます。さらに、音楽の授業や卒業式で流行の歌が多くなっていると感じており、昔から続く伝統的な歌や地域の祭り・行事をもっと大切にするこ

とで、ローカルな魅力を学び、郷土愛を深めることができると考えます。グローバルな視点を持つためにも、まずはローカルを好きになる教育を推進していただきたいと思います。

【佐古会長】：ありがとうございます。時間の都合もございますので、長尾委員と中西委員のご発言で一旦区切らせていただきます。

【長尾委員】：先ほど松坂副会長が強いリーダーシップの必要性に触れられましたが、私も同感です。校長先生や教育長、市長などがリーダーシップを発揮して方向性を示していただければ、現場も動きやすくなると感じます。また、喜多委員が言われた気候変動についてですが、私も危機感から5年前から生ごみ処理機の普及活動を行っております。現在、夏場にプールや外遊びができないなど子どもたちにも直接的な影響が出ております。ワークショップなどで「なぜこんなに暑くなったのか」を子どもたち自身に考えてもらい、身近な問題として取り組む姿勢が大切です。最後に、大阪の市立大空小学校の取り組みを描いた映画『みんなの学校』のように、支援学級の子どもも共に学ぶ姿勢を参考に、来年2月に木村泰子先生をお招きした講演会を計画しておりますので、ぜひご参加いただければと思います。

【佐古会長】：ありがとうございます。それでは中西委員、短めにお願いいたします。

【中西委員】：先ほど家庭福祉の話が出ましたが、「小1の壁」について、小学校に入学すると学習が始まり疲労が高まる中で、保護者が子どもの学年ごとの変化を把握しきれていない問題があります。幼稚園と小学校の違いや変化についてパンフレットなどで具体的に伝えるなど、家庭教育と学校の接続を強めることが重要です。また、企業との連携も必要です。法律で時短勤務が3歳までとされるケースが多い中、親が働きやすい環境を企業と共に作ることで地域全体の魅力向上につながります。最後にアイデアとして、集団行動が苦手な子どもや疲れてしまった子どもが、クッションなどに座ってリラックスしながら本を読んだり授業を受けたりできるような「ルーズな場所」を学校内に1～2箇所作ることが提案できます。低コストで実施可能であり、一人一人の違いを認め合える教育の場につながると考えます。

【議事 国における議論の動向について】

【佐古会長】：不登校に関する実例から始まり、非常に重要な議論をしていただきました。本日は村川委員から、現在進められております新しい学習指導要領の内容などについて、話題提供をお願いしたいと思っております。村川先生は本学・鳴門教育大学の名誉教授でいらっしゃるしまして、元中央教育審議会の委員なども務められ、カリキュラムマネジメントがご専門で、この方面に非常に詳しい先生ですので、第1回目ということで情報提供をお願いしたいと思います。村川先生、よろしくお願いします。

【村川委員】：＜資料に基づき説明＞

【佐古会長】：はい、どうもありがとうございました。ちょっと時間が押してしまして申し訳ありませんでした。ありがとうございました。せっかくの機会ですが、今の村川委員のご発表に対してご質問・コメント等はございますか？

【大藪委員】：徳島大学の大藪と申します。面白く伺いました。まず私からちょっとご紹介させていただきますと、私は特に徳島県にゆかりもない完全な外部の人間で、家族も徳島県外におりまして、子どもは今中学校の関係で東京に行ってしまったという感じで、子どもを人質に取られておりません。やりたい放題の人間なんですけれど、まず今の小学校の5分の時間を作るという話は、それはそうなんだろうと思うんですけれど、まず小学校は何時間授業をしなきゃいけないとか、そういうルールはないんですか？授業のいわゆる各教科の実数はそのままで、コマ数がそのままで5分減ってるわけですか？

【村川委員】：そうです。

【大藪委員】：それは大学だったら1コマ75分とか90分とか決まってるじゃないですか。そういうのがないのかなということです。

【村川委員】：これ今研究開発学校の中でそのルールをしている、今の学校に関しては。だからこれは省令も全部変えてもらわなきゃいけない。

【大藪委員】：今の学校に関しては変えてもらわなきゃいけないと。

【村川委員】：結局この時間の生み出し方に関して、今先取り研究校が332校動いているんですけれど、約半数が5分減らすというやり方でやっています。だから次の指導要領の改訂で文科省が認めてくれる可能性は高いと思います。

【大藪委員】：そこは分かります。結構この長い教育行政でどういう議論がされているか僕もちゃんと把握してるわけではないんですけれど、元々小学校に英語を入れたりとか、そういうことをやったわけですよ。逆に振ってたのを逆に振り直そうとしてるわけですか？先生の負担ってそこでもものすごく増えたじゃないですか。名古屋大学でいたとき私、妻が小学校の英語でヘルプに入っていたんですけれど、学校の先生だけでできないから、うちの妻はアメリカの大学院を出てるとかあるので、それで小学校ほとんどで、週に2、3校とか回ってやってたらしいんですけれど、でもほとんど学校の先生対応できないからって。だからもうあれは明らかに学校の先生の負担だったと思うんですよ。だからそういうのは逆にやめるということですか？

【村川委員】：やめるというか、結局45分、中学校は今目黒区は50分授業を45分でやっているんですよ。まず今まで45分、50分でやってた授業を5分短縮してもきちっと子どもの学びを保証できるということは、そういうデータを取れてるんです。その上で今言ったように40分授業にすることによって年間127コマ浮きますので、結局学校での子どもたちの学習時間は減ってはいるんですけれど、学力は保証されてます。

【大藪委員】：あの、大学の先生だからあまりあれですけど、それちょっと議論として矛盾していて、時数が減って維持するというのは、減らしていけることになるので。無限級数でいくので、だからやっぱり何かを犠牲にしていると思うんですよ。で、それはできた学校だったから出来てるんです。逆に出来てない学校が存在するんじゃないかな。目黒区の中においては。

【村川委員】：目黒区じゃなくてもいいです。目黒区のような取り組みをしている学校は私が知っている限り、関わっているのは目黒区と滋賀県と福岡県ですが。

【大藪委員】：目黒区は今、小学校22校全部動いてますか？

【村川委員】：目黒区以外も同様の取り組みをしようということで他の都道府県でも取り組んでいます。

【大藪委員】：ちょっと不安だなと。

【村川委員】：ただ目黒区の教員に関しては目黒区を出たいという方は誰もいませんし、目黒区を出た方は戻りたいと言われています。

【大藪委員】：目黒区は結構お利口さんだからだと思うんですけど。

【村川委員】：まあそうですけれど、ただ今回いろんな資料をいただいたりしていて、これを実現するための一つの方法としてこういうやり方もあるし、今先ほども言いましたように国がこれだけ言っているということは実現の可能性が非常に高いので、県としても準備をしておいた方がいいということでお話しさせていただきました。

【佐古会長】：はい、ありがとうございます。

【議事 意見交換】

【喜多委員】：今の学習指導要領を作り直しているというところですが、文科省と作り直しをしているメンバーでもある知人から、話を聞きましたが、「余白」に関してはその方向性でいくだろうと聞いています。実際にスウェーデンにサステナビリティを学びに訪問したこともあります。スウェーデンでは「the power of recovering」という言葉が使われていました。私の解釈としては、余白とよく似ている考えかなと思っています。休憩をすごく大切にされていて、夏休みを2か月もとったり、宿題を一切出さないとか、これは体を鍛えることも同じだと思います。毎日ハードなトレーニングするよりもしっかりと休養をした方が成長します。頭を鍛える勉強も余白を活かした補習だけでなく、こういった勉強をしない時間を創るという余白というのも大事であると思います。また先ほどの説明にもありましたが、5分の削り方というのは、ただ単に授業を短くするというのではなく、例えば黒板に板書するのに10分かかるものをタブレット端末で一瞬でみせるとか、内容は変わらないけど、ITの力を活用して時間を創るという方法なら学び自体は削られず時間をつくることができるかと思っています。

【大藪委員】：小学生、大丈夫ですか？

【喜多委員】：まあ、それが多分今実験中というところもあるかと思っています。

【中西委員】：あの、余白を増やすという考え自体は本当に素敵だと私も思いますし、私自身も子どもが不登校になったおかげでって言ったらおかしいんですけども、仕事もままならないので、思いっきり仕事の時間削って、自分自身もなんかある意味余白が生まれたので、もう1人子ども産めるかなみたいな、子どもも増えましたし、仕事の生産性も上がったと思ってます。なので、なんかこう強制的に、そういうリーダーシップなかったんですけども、その強制的に余白が生まれたことで生み出した価値っていうのが増えたなと思いますし、これからAIを使っていく中でますますこう余白が生まれる、余白が生まれる中で自分の価値を生み出していくっていうのを私自身の人生の戦略にしていきたいなと思ってますし、余白についてはそう考えてます。一方で、結構中学校の不登校の話も身近に聞くんですけども、先生がおっしゃってたように、英語やプログラミングも入れていけるんですか？っていうとか、全体的に何か勉強が難しくなってるのか、ちょっとやってないんで分からないんですけども、英語が始まって、なんかこうローマ字読みをしたから、小学校の時ローマ字読みだったから、中学校に入っていくなりこうなんかローマ字読みじゃなくなったから、全然できんようになったみたいなことを言って、実はその社員でオーストラリアに20年住んでて本人は超ネイティブで、でも子ども全然英語でできなくてむっちゃ困ってるみたいな状況があって、授業に対して、その余白を生むことは当然いい、しかしその今の授業がどんどんICTが増えて、英語が増えてっていう状況で走り続けるのが同時に大丈夫なのかなっていうのは私自身も少し不安に思ってますので、喜多委員がおっしゃってたように、地域の一次産業に関わるとか、小中学校がもっと目線を落としたというか、生きるって楽しいとか、その地域に関わるのが楽しいみたいになんかこう、技能的なところを先にガーッと入れるんじやなくて、その余白でもっとこう地域との関わりだったりとか、もっとこう生きるにつながるようなこともできたら徳島らしいんじゃないかなと思いました。

【喜多委員】：一言だけすみません。先ほど、余白というところにフォーカスしてタブレットの活用の話をしましたが、今の先生のお話を聞きながら思い返すと、スウェーデンでは逆にデジタル教育ということに失敗し、紙に戻す動きもみられるので、一概に正解を導き出すのは難しいですね。現場では紙を残しながら、何かいいところだけをデジタル化していき、DX推進が目的にならないように、うまくバランスを取りながらできたらいいなと思いました。

【佐古会長】：村川先生、何かありましたか。

【大藪委員】：小学校の上の学年はどう考えるか、中学校は。

【村川委員】：まず目黒区は中学校が45分授業を始めたのは、まだ2年しか経っていません。中学校に関しては小学校をまず実験的にやって、5年ぐらいうちやってみて、中学校に今研究の中心が行ってますけども、中学校に関しても50分でやってたことを45分で十分できるということで、あとはやはり約30分早く子どもたちが帰ることになります。その分、先生方がやっぱり教材研究とか子どもについての話し合い、あるいは気になっている子どもへの対応、こういったところに使ってますので、今のところはネガティブデータは聞いておりません。ですから今、先取り研究校も含めて400校、来年はもっと増えると思いますので、そのあたりのやっぱりデータを睨みながら、ネガティブデータが今後出てくる可能性があるので、またそのことは私の分かる範囲でこういう場で報告できたらいいかなと思っております。

【大藪委員】：目黒と東京は、ある意味中学受験の盛んなエリアで、30分早くなったら塾に30分早く行けるので、多分ウィンウィンなんだろうと思うんですけど、だからそれを全国でやるかというところ、ちょっと気にはなります。

【喜多委員】：城北高校が実際に去年から授業を5分短くしてると思うんですよ。なので徳島県でもそういったデータは今後出てくるかなと思います。

【長尾委員】：工藤勇一先生っていう方がおられるんですけど、横浜でしたね、テストをなくしたり、宿題なくしたりで、これでも子どもらの偏差値上がってるんですよ。やっぱり体験学習であったり、探究の学習とかを取り入れることで成績も結局、結果が残っているという事例もあるので、余白は非常に大事なことなのかなと思います。

【佐古会長】：本日が第1回の会議ですので、できましたら全委員の方々から一言何かご意見をいただきたいと思うんですが、石橋委員いかがでしょうか。

【石橋委員】：平島小学校の校長をさせていただいております石橋です。皆様のご意見を伺いながら、本校でも不登校になっている子、それから私自身の子どもも高校生の時にということも経験いたしましたので、そうだなと思いながら聞かせていただきました。まず子どもの現状を知ることから始まって、ただ学校に來れたらいいな、こうなったらいいなという思いで教員の方は考え実践しています。その中でご家庭・ご家族の背景や、現状、お考えとか、そこもかなり左右されますので、そこを理解しながら一緒にやっていきたいなということで動いています。ただその上に、教員がそのお子さんの先を見て、この子が将来大人になった時にこうなっていたらいいんじゃないかなって、そこをご家族の皆さんと相談して、将来を見据えてやっぱり引っ張るところは引っ張っていくところも必要じゃないかなと思うと、なかなか難しいところがあるのですが、医療関係であるとかいろんな諸機関と連携しながら、本当にできる限りを尽くすというところに現状があるかなということです。本当に貴重なご意見いただきました。あと、現場の先生は今、本当に働き方改革を行う上で意識は少し変わってきています。定時や定時近くで帰ったり、持ち帰りが少なくなったりしていますが、ただ在校での勤務時間を調査しておりますので、やっぱり持ち帰ることはあるんですよ。それは個々の家庭の事情もありまので、目標数値をもちろん目指しているのですが、それがどうなのかなっていうところはやっぱりあります。その中で現場の先生が働きやすくなるためには、やっぱりトップダウン、もしくは先ほどもありましたリーダーシップを、校長もしくは教育委員会、国など色々あると思いますが、しっかりとることが必要だと感じます。私が今年度、試みていくつかやめていくものがあつたんです。そしたら「これなくていいんですか？」と、これが現場の声なのです。私は「え、なんで？」と問い返します。そこで、何か新しいものを生み出そう、時間やものやことであつたりと、話をしています。そのようなことがありますので、やっぱり現場とこの会議との温度差をなるべく少なくしていきたい、ということを考えております。また皆様と一緒に参加させていただけたらと思います。ありがとうございます。

【佐古会長】：はい、ありがとうございます。現場の実情と言いますか、理念と実践の間のギャップみたいなものがあるというご意見でございました。乾委員、どうでしょうか。

【乾委員】：名西高校の校長の乾と申します。この4月に着任した1年目の新米校長ですの
で、まだまだ学校の中で職員の働き方であるとか、マインドセット、前例踏襲ではない新た
なものへ作り変えていくというところを、職員と色々対話をしながら進めているところでご
ざいます。前任校の教頭時代のお話になりますが、働き方改革、職員の時間外在校等時間を
どういうふうに短縮しつつ、職員に自分自身をプロデュースする、ブラッシュアップする時
間をどういうふうに作ってもらうかということ課題としつつ、同時に子どもたちとしっかり
向き合う時間を確保すること、子どもたちには自分で考えて行動して自己決定をする瞬間
をたくさん作っていくという取組にご協力いただきました。先ほど長尾委員さんからもお話
があった工藤勇一先生を取組に通じるところがあるかなというふうに思っています。特に、
探究の時間を活用して、地域の方々にもたくさん入っていただき、子どもたちの自ら考えて
行動する力を伸ばしていこうというふうに取り組んでみました。失敗をしても大丈夫だ、逆
にどんどん失敗をしてみよう、それは挑戦しないと得られなかったエビデンスであり、あな
たたち自身が掴んだ独自のエビデンスだからしっかりとそれを貯めていこうっていうことを
生徒たちにもずっと語りかけてもらいました。全ての子どもたちが変わったということは申
し上げられないけれども、トライをして、挑戦して失敗しても仲間がいるので色々なアイデ
アを出し合いながら、粘り強く「じゃあこっちのやり方やってみよう」というようにレジリ
エンスを少しずつ高めていった生徒たちが増えてくれたなと感じるところがありました。そ
れは入試を始めとした進路決定の場面でもすごく感じたところです。探究を通しての体験活
動というのが進路決定をしていく中でプラスに働いたと感じる場面がありました。早く大学
入試で結果を得て楽になりたいという生徒たちが増えてきている実態もある中、最後まで
粘り強く頑張れた生徒が増えたと感じることができました。探究活動を通してレジリエンス
を高めながら、かつ理想としたのは、探究を通して学ぶ中で教科との往還、この探究をさら
にブラッシュアップするには教科のこの力が必要だよな、そういう生徒の気づきを増やし
て、教科との往還ができる仕組みを作りたいと思っていました。この部分は、手応えありと
まではいかなないけれども、今年度も前任校の先生たちが継続して取り組んでくださって
おり、子どもたちの活躍の様子が耳に入ってきています。

本校でも職員には繰り返し根気よく伝えていることがあります。「エラー・アンド・ラー
ン」を今年度はキーワードにしており、「どんどん失敗してください、これまでやってなか
ったからやらないじゃなくて、やらなくって変わってないものだったらチャレンジをして変
えていきましょう。」と職員に声かけをしてやっているところです。ただ校長としては、先
ほどのお話にあった余白の部分というのをしっかりと生み出していくというのが私自身の課
題だというふうに思っています。ありがとうございました。

【佐古会長】：はい、ありがとうございました。それでは井上委員、いかがでしたか。

【井上委員】：今日私も色々皆さんの話を聞かせていただいている中で、不登校の話題が出
ていたので思い返してみますと、いわゆる不登校って呼んでいた前は「登校拒否」といった
言葉で呼ばれていたのかなっていう記憶があるんですね。学校を拒否している、そこから
「それおかしいよね」というようなことで、今は登校をしていないという状況に変わってき
ていますけれども、本当に今の学校のあり方が大きく問われているのかなという意味で話を
聞かせていただいていた。自分も子どもの頃も含めて画一的に來たと申し上げましたけ
どね、こういうふうにしていきましょうという画一的じゃなく、多様性を認めていく、そう
いう場が変わっていつているのかな。学校の中でも話に出ましたが、学校としても色んな

多様性を受けていく、そういう部分も指摘されていますし、県であれば「学びの多様化学校」ができますし、それぞれの市町村の教育委員会でも教育支援センターを作ったり、そういう形でどんどん学校そのもののあり方が問われているなと思いながら話を聞かせていただいていた。で、その中である意味「余白の時間」という後半出てきた部分については、本当に学校の中で子どもたちが本当に生き生きとそれぞれの児童生徒が自分の良さや特性なんかを発揮しながら、また獲得していきながら生活できていく、学んでいける部分になっていくのかなという話も聞かせていただいております。なので、今日私は市町村教育委員会の代表というような形で呼んでいただいていると思うんですが、こういう県の教育振興審議会の中ですね、大綱も含めて色々な話を聞かせていただいて参考にさせていただきながら、リーダーシップというお話もいただきましたので、そのあたり力を注いでいけたらなと感じさせていただいた今日の会でございました。ありがとうございました。

【佐古会長】： はい、ありがとうございます。

【大藪委員】： 僕、徳島県で気になっているところがありまして、これを発言したら何が起きるかも全然見当がつかないんですけど、高校入試が1.00倍とか1.01倍、あれはなんとかならないんですか？

【佐古会長】： あの、なんとかならないのですか、ということは、どういう趣旨でおっしゃってるんですか？

【大藪委員】： まず中学校の先生が決めてしまってるわけです。高校入試の結果を。それって不当な行為だと思うんです。せっかく入試問題を作っている高校の先生がいる中で。ほんとでそれでもう1.00倍になったら、もうほとんどみんな通るだろうって勉強しない。だけど、都会で受験を戦ってる子どもたちは、3割とか2割とか落ちるわけじゃないですか。だからもう最後の1ヶ月必死に勉強するんです。それって1年分の勉強量にも相当する学力を獲得するのを失ってるんですよ、徳島の子どもは。というのを、私が徳島に2019年に来た時にそれを聞かされて、僕が一番真っ先に気になったんですけど、ちょっとそこはなんか、徳島県としてそれをやってしまっているのがすごく気になってしょうがない、これがなんとかならないんですかねという。

【佐古会長】： この委員会とすれば、中学の進路指導のあり方を見直すという方向ですね。

【中川教育長】： 中学校が決めているわけではないです。1.00倍だからといって全員合格するわけではないです。

【大藪委員】： 例えば徳島市立高校理数科のような一番難しいところ、あれが定員40人中、今年なんかも40人切ってましたけど、40人中40人しか出願してこないとおかしいじゃないですか。なぜそんなことが起きてるんですかという質問です。

【喜多委員】： 私の経験ですが実際に中学の進路相談で先生から「あなたのレベルだったら今ここの学校は何人オーバーしているから難しい、こっちなら受かるよ」というような話がありました。中学校の先生が同様に進路を導いているのは実情かと思います。

【佐古会長】：ちょっとこの件は、今ここでどれだけ議論できるかというところがあるので、中学校の進路指導について問題提起されたということで受け止めます。

【川原委員】：徳島市内で学習塾を経営しております川原と申します。城東高校出身で、高校1年生の時に東京大学に行きたいと思いまして、それで田舎から東京大学を目指すという中で結構壁を感じて、もちろんライバルがいないですとか、受験に必要な科目が学校の授業で受けられなくて独学で勉強しなきゃいけなかったりだとか、10年くらい前は「朝補習」というのがあって、朝7時50分から学校に来て7時間授業プラス1時間みたいな感じで授業していた時代があって、そういったものは本当に必要なのかな、その時間があるんだったらもっと違うことを自分に大事なことを勉強したいなみたいなのを高校生の時に思ったり、あとはテストがすごく多くて、中間・期末・学力テスト・模試が何回もあって、じゃあそんなにテストを受けてばかりで、テストっていうのはすごく大事なものでテストを受けないと身につかないというところがあるんですけど、でもじゃあその回数を増やせば増やすほどいいと言われるとそうではないなっていうふうに高校生からずっと考えています。なので余白っていうお話はすごく今心に響いたと言いますか、やっぱりいい授業を受けて、私も高校に入ってからすごくいい先生方がいらっしゃって、授業が面白くて感動して、それで苦手だった数学とか化学が得意になったりだとかそういうことがあったので、余白の時間を活用して先生方が今の面白い授業をもっと面白くしたりだとか、生徒自身がもっと自分で考えるような、今だと結構受動的に授業を受けるばかりで「補習行かなきゃ」みたいな感じで、何のために勉強してるのかっていうのはあんまり分かってない子がすごく高校生でも多くて、自分で噛み砕く時間っていうのをすごく作らなきゃいけないなっていうふうには感じています。でもただ余白を作るだけだと、もちろんサボってしまう子が多くなってくるので、適度な締め付けも必要だしっていうところで結構難しいなと思うので色々考えていかないといけないなと思います。

【谷委員】：吉野川市立山川中学校で校長しております谷と申します。よろしく申し上げます。今日たくさんいろんな立場の方からのご意見を聞かせていただいてありがとうございます。最初にあった長尾さんの三者面談での話も、中学校であればあるあるというか、学校としては、もちろん頑張ってるよ、すごいよっていうこともその時に伝えられたと思うんですけども、やっぱり中学校は最後3年生で卒業後どうするのかっていうところが常に頭にあり、それが点数で評価される部分が大部分ありっていうところで、やっぱり目指すのがどうしても受験に近くなればなるほどこのテストの点っていうところになってしまう。それはとても子どもたちにとって苦しいことなだけけれども、現実っていうのが突きつけられて、みんなが苦しくなっちゃってるところもあります。ただ、じゃあそこを何もなくフリーで通ったら次の社会はどうなのかって言ったら、やっぱり大学行く時にも進学する時には何らかの指標で評価をされるし、もちろん企業に入る時もそういうふうになっている世の中で、やっぱり少しずつ生徒の主体性とか伸ばすところは伸ばすんだけど、それに頼るところもどっかは作らなきゃなっていうところは思っています。またちょっと論点違うんですが、働き方改革のところで、中学校の教員が一番、勤務時間外時数が多いというのは先ほどのグラフでもありましたけれども、中学校で一番多いのはやっぱり部活動です。部活動の地域展開ということですごく自治体の方も県の方も一生懸命していただけるんですけども、これこそ地域に返してもなかなか地域の受け皿がないので、学校の教員が一生懸命やっているというところがあります。ただ10年前、20年前と比べて「部活動じゃなきゃ」「ここで子ど

もを育てる」というような教員の意識はだいぶ薄れているので、やっぱり学校の授業の中で、教育活動の中で子どもを育てる、部活動はそれこそ好きを育む、好きを見つけてってところなので、それも続けながら昔のように無我夢中にやらないみたいなのところをだいぶ教員の意識も変わってきているかなというところがあります。今後また徐々に変わっていくのかな、変わらなきゃなっているところがあります。 もう一つ、中学校と高校の授業のレベルが高くなっているというのが話題になりましたけれども、まさに思考力、判断力、表現力を鍛えるような問題というか、私は技術・家庭科の技術分野の教員なんですけれども、英語の3年生が受けているテストとか社会のテストを見ても全然分かんないっていうぐらいとても難しい問題を一生懸命解いています。実際にすごく社会が高度化しているので、それに伴ってやっぱり高度化しているっていうのは仕方がないかなと思っています。そこは難しい議論ではあります。ただ今後、情報活用能力の抜本的向上ということが今言われていますけれども、地震があった時にすぐに情報が、フェイクニュースでいっぱい出るような世の中、それでAIがどんどん進んでいくところで子どもたちはAIに答えを求めてしまうようなことが今どんどん、学校教育よりもどんどん世界の方が進んじゃっているんで、それをなんとか子どもたちに正しい方向を導こうなっていることで、やっぱりその部分もこれから増えていくんだろうなっていうようなことを思っています。なかなか教育に置かれた状況って難しいなって思いながら今日は聞いていました。ありがとうございました。

【村上委員】：松茂幼稚園の村上です。幼児教育という立場であれなのですが、幼児教育なので時間割がそもそもありません。であと学び方っていうのが「遊びを通して」っていうところが本当に他の校種さんと大きく違うところかなと思うんですが、やっぱり学びの本質っていうところ、本当に一緒に幼小中高つながっているなってお話を聞きながら思っていました。やっぱり幼児教育で一番私たちが目指しているのは、さっきおっしゃっていたレジリエンスとか自己肯定感であるとか、非認知能力をしっかりとつけていくこと、ここがこれから伸びる力っていうところにつながっていくのかなと。遊びなので、子どもたちっていうのは好奇心、自分のやりたいことをすごくやるんです。で、その中で「何でだろう」っていうことを感じる、本当にすごく感じて「それを突き止めたい」って思うんですよね。これってやっぱり学びだし、これからずっと先にこういう気持ちで学びに取り組んでいけたら本当に面白いだろうなと。私自身も小学校の勉強とか難しいと思うんですけど、でも子どもたちが「ちょっと難しいけど知りたい」「面白そう」「学ぶって面白いな」っていうところ、あとなんか折れない心であったり、「これは苦手だけどこっちは得意」とか、粘り強くするとか、友達と話し合ってするとか、自分たちでルールを決めていくとか、「ルールってこういう意味があるから大切、ルールがあるから面白いんやな」とか、そういうところも幼児期にしっかり学んでほしいなと思って今取り組んでいます。幼児教育で私たちがよく使う言葉で「学びを後押しする」ということをよく使います。私たちが「この遊びをしなさい」ではなくて、子どもの興味関心、「こういうところすごく興味持って今学んでるな」っていうところを私たちが環境準備したりして、その学びを後押しするっていうことがやっぱり大事で、それってすごくずっとつながっていくのかなと思っています。シャボン玉とかをしても、晴れの日シャボン玉と雨の日シャボン玉って面白いところが違って、子どもって息の吹き方で大きいのができる、小さいのができる、雨の日は地面について割れない、その理由って何でかなと思っていっぱい考えるんですけど、もちろん子どもなので答えは出てこないですけど、子どもなりに「シャボン玉と雨は仲良しだからやな」とかそういうふうに子どもたち

って考えるし、総合的に友達のするのを見て面白がって一緒にやってみるとか、そういう学びを幼児期にしています。なのでそういうのが小学校につながっていったらいいなと思って、学びの架け橋の授業にも参加させていただいたんですが、本当にそういうところをつないでいけたらいいなと思っています。学びの架け橋事業をした時に1つやっぱり思うのは、小学校の先生が1年生の時にもっと複数体制で教えられたら本当にいいなって私は思いました。

【佐古会長】： はい、ありがとうございます。それでは最後に佐野委員からお願いいたします。

【佐野副会長】： はい。私、徳島文理大学に勤めてるんですけども、ちょうど2年前に徳島に帰ってきました、東京にずっといたんですけど、東京では多分引き受けないであろうみたいな仕事結構徳島に来ると「もう人おらんのかいな」「また僕ですか」みたいな形で、今コンクールの審査とか色んなところに行ってるんですけど、とても楽しいですね、今のところは。今日は僕、もうちょっと形式的な会議だと思ってきたんですけど、いきなり本音というか本質論の議論があって、とても今後どうなっていくか楽しみにしております。僕、指導要領の仕事もかつてはやったことがあったし、さっきの目黒区の話出ましたけど、私、足立区の100校以上の小中にずっと20年くらい、音楽関係を含めて絡んでたことがあって、言ってた目黒のことはよく分かります。足立との違いとかね。教育ってほぼ10年で指導要領が改訂されるたびに、やっぱりこの10年我々が何をやってきたかをちゃんと振り返って反省して、「こういう課題が本当にあるから次へ行くんだ」ということがあんまり議論されないんですよ。議論はされてるんですけど、「新しい社会にはこれが必要なんだ」というのがどんどん出てきて、現場はこの移行期に向けてその情報を取り入れることばかりなんです。じゃあそれを捨てていくんですか？捨てないんですよ。でもできてこなかったから新しいものが提案されてくるわけで、そこらあたりもうちょっと我々自身も反省というののもちゃんと口に出して議論をして行きたいなと思っております。私自身は徳島市立高校普通科総合選抜制第1期で、中3で小松島だったもんですから、実家が郡部から徳島に行くのに「なんでこんな制限されるの？」「僕、二軒屋駅の方が近いんですけど」みたいな話ですよ。バスでこんな葦の生えた方に行くんかいみたいな。でも結果的に僕は市高に進んでいなかったら芸大に進む道は自分で見出せなかったと思うことで、個人には感謝してますけど、やっぱり振り返された世代なんですよ、親も含めて。だからやっぱりこういう重要な会議では、少しずつでも我々反省しながら振り返りながら着実に仕事をしていけばいいと思っております。今日の議論を聞いて本当に楽しみになりました。これからもよろしくお願いいたします。ありがとうございます。